
Flowline Flower 2

みみずの紐

書名 flowline flower 2
発行日 2019/05/06
発行 変態美少女ふいろそふい。
印刷 変態美少女ふいろそふい。 出版部
連絡先 circlemaster@hentaigirls.net

もくじ

罫ねじり

表紙デザイン — 野沢菜 / 片桐天音

表紙イラストを除く全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

To the extent possible under law, 野沢菜 and 片桐天音 have waived all copyright and related or neighboring rights to cover image. This work is published from: 日本.

:comet: <https://abs.twimg.com/emoji/v2/svg/2604.svg> and
:cherry_blossom: <https://abs.twimg.com/emoji/v2/svg/1f338.svg>
emojis used in cover image are licensed under a CC BY 4.0 by
Twitter, Inc and other contributors.

群の階数 (©mimuzi.com)

群
の
階
数

その日、川端泰葉カワバタヤスハを朝早くから叩き起こしたのは、嘔吐えづくほどに強烈なアンモニア臭だった。

アスファルトに寝転がったままの彼女はこの匂いを嗅ぐたびに、アルコールに踊らされたであろう昨晚の自分を叱責している。だがそれは多くの状況でその場に限った反省であり、日を跨いでその経験が生かされることはほとんどない。

事実、自動販売機のみが二十四時間稼働しているこの無人酒場はあまりの立ち小便の悪臭から犬も近寄らないことで有名だったが、彼女がここで一夜を明かすのは今年に入ってから既に五回目だった。

「寒ッ……」

今年の一月や二月頃は路上生活者を苦しめた夜の冷え込みだが、三月に入る頃には路上の水溜まりも凍らなくなってきた。まだお世辞にも温かいとは言えないが、泰葉のような飲んだくれが仮に帰宅に失敗したとしても、凍死するリスクは格段に低下したのである。

泰葉はお天道様に向けて大きく伸びをし欠伸を吐き出すと、ぼさぼさに乱れた赤髪を手櫛で整え、黒のジャン

パーに張り付いた小石を払い落とし、ポケットの中身を一通りあさった。

現れたのは百円玉に、十円玉に、ポロポロの手帳と、スロットのコイン。そして噛み終えたガムを包んだレシート用紙。

次に口から飛び出した、

「……迎え酒でも呑まんと、二日酔いでやってられへんわ」という独り言には、酒飲みとしての矜持に驚嘆すら覚えさせられる。

とは言え、昨晚のどんちゃん騒ぎで吹き飛んだ彼女の懐事情を考慮すると、飲酒という娯楽からは一見すると程遠い。

だがここ西成の釜ヶ崎と言えばドヤの街・あいりん地区。消費税もどこ吹く風の極端な価格破壊が起きている事実は周知されている通りである。

泰葉は自販機に百円玉を押し込み、取り出し口から「すごいワンカップ十二割」を取り出すと、息もつかせずアルミ蓋をベロリとひん剥きゴクリ、そいつを一口で呑み干してしまった。

が観光客の体を醸し出してはいるものの、本当に観光するつもりならば踏切の先ではなく今頃新世界に向けて足を運んでいるはずだ。

泰葉はわざとらしく、男に向かって小声で囁いた。

「……実は今朝、ウチの方でポリさんから連絡もろててな」

「警察イ？」

「この子、最近お勤めを終わらしたばかりやさかい、西成の方でチャーんとキレイな日雇いを紹介したってほしいうてな、直接に頼まれてますねん。なんやったら、電話して確認してみましょか？」

もちろん出まかせだ。

酔い潰れていた泰葉が今朝連絡を受けることもできなければ、そもそも西成警察署との直通電話そのものが存在しない。

「へえーっ！ ほんまでっか。あチャー、えらいすんまへん。そらウチみたいな悪どいもんが、商売っ気出したらあきまへんわな……」

あっせんする男の顔に陰りが現れたのは、紹介手数料の計算で叩いていたそばんに横槍が入ったからである

う。苦笑いを浮かべ、あたかも粗相を恥じるような体を装ってはいるが、その目の奥は笑っていない。

無論この男も、どうせ泰葉のつまらないハッターであろう、と睨んではいる。だからこそ、商売の性質上方が一があつてはまづいのだ。

もしこの女を半ば無理矢理連れて行った後に、泰葉が警察に通報したらどうなるだろうか。あるいは本当に警察からの依頼でなくとも、その筋の人間から匿うための方便だったとしたらどうだろうか。

泰葉という女の不気味な立ち位置によって、彼が得られるであろう僅かばかりの報酬はわざわざ危ない橋を渡るほどのリスクに見合わなくなってしまうのだ。

「えらい邪魔しましたなあ。ヤスの姐さん、ほなまた」

無駄な労力はかけるまいと、業者の男は足早に去っていった。野次馬のフータロー達も興味を失うといつもの定位置へと戻っていき、場違いな格好の娘だけがその場に残った。

「あの……助けてくださってありがとうございます。ヤス……さん？」

職安からキャリアバッグを引きずって約二分。泰葉が案内したその建築物はあいりん地区の中心街に軒を構え、「エヌ・ピー・オー法人・釜ヶ崎職業無料案内所 あいりんの罫」という看板を表に掲げている。窓ガラスの内側には「女性や障がい者の強い味方・無料朝食付き」と白インクの手書き文字で書かれ、僅かばかりの集客能力を通りに向けて発信していた。

「あいりんの……つち、とき？」

「ハハ、読めんやろ？ うちも読めへんかったけど、『ねぐら』ちゅうんやて。あいりんのドカタには読めへんやろうに、どないしてこんな名前になったんか不思議やわあ。ささ、上がって」

泰葉はホコリを被った灯油ストーブの電源ハンドルを捻ってから、奥の黒ずんだ台所に立つ。

「朝メシ、うどんでええか？」

「あ、はい。頂きます……」

「よっしゃ」

泰葉はジャンパーを脱ぎ捨てて手を洗い、エプロンを上からかぶると、ポットの中に残っていたお湯をそのま

ま寸胴鍋に空けた。

「お嬢ちゃんは東京から？」

「ええ、はい。今朝着いたばかりで……」

鍋のお湯がチンチンに沸いた頃合いを見計らって、お湯の中に冷凍うどんを二玉突っ込む。隣の雪平鍋では既にだし汁が沸き始めており、そちらには冷凍ネギの塊が放り込まれた。

「ここは釜ヶ崎地区……いわゆる『あいりん』に流れ着いた女性、老人、身体障害者などなど、比較的『社会的弱者』に分類される輩に日雇いの仕事をあっせんする、えーつと、トクテイヒエイリカツドウホウジン、ちゅうたかな？ そんな施設や」

「はあ……」

「なんやなんや。ウチみたいなフーテンのその日暮らしが、そないな社会奉仕の精神を遵守していることがそんなにも意外かいな」

「あつ、いえ、その、そういうわけではないんですが……」

泰葉は茹で上がったうどんを一旦ざるに揚げ、使い込まれた二つの漆器にきちんと等分する。それぞれに卵を

「いや、特にいいです」

「乗り気やないんか」

「いや。泰葉さんってレイプした後で普通に優しく接するあたり、DV男の素質ありますよね……」

「なんやつれへんなあ、もうヤス姉とも呼んでくれへんし」

「気が変わったんです。ちょっとトイレ行ってきますね」

「あ、お嬢。最後に一つ、頼みたいことがあるんや。聞いてくれるか？」

「後にしてくださいよ。ちょっと長いですから」

「さよか、ほいじゃ待つとるで」

はじめ泰葉はしばらくトイレに籠もったきりで外に出てこない公江を心配していたが、そのうちに睡魔が襲ってきたのでとうとうとしてしまい、はっとして二度寝から目覚めると、既にキャリアバッグが部屋から姿を消していた。

ちゃぶ台の上には三千円と、書き置きで一言だけ残されていた。

「気が変わったんでお先に失礼します。やっぱり泰葉さんは、ここにさまよった人をフォローしてあげてください

い。またいつか」

泰葉の喉から、叫びにも似た苦しい嗚咽が漏れ出した。

*

ひよっとしたらまたすぐに帰ってくるかもしれない、という泰葉の淡い期待もほんの三十分で潰えた。

泰葉はむしゃくしゃした痲癩を鎮めるべく、目的もなく外をぶらぶらと散歩していると、職安の前にできている人だかりがいつもよりも長引いていることに気づいた。

「取り壊しハンターイ！」

「ハンターイ！」

どうもただの日雇いだけでなく、あいりん職業安定所の取り壊しに反対するべく集った、日雇いの労働組合員も含まれている。

「なんや、取り壊すんかいな、ここ」

寝床が失われる人々には申し訳ないが、この古ぼけた街が少しずつ変化を遂げている様子を見て、泰葉は少しばかり気持ち悪いらいだ。

「そーいや来月には、ぼちぼち新元号も発表やったな……」

「ええっと、すみません、今はちょっと、その……今は財布に入れ忘れていたみたいで……」

「ふーん……ま、ええわ」

「えっ、むしろいいんですか？」

「ここやと運転免許証もマイナンバーカードも持つとる方が少ないさかい。まあ、また思い出したらでええで」

「はい、そうさせて頂きます……」

「とはいえ阿部はんやら公江はんやら……ってのもむず痒いやろ。ウチは適当に自分のこと、なんとなくお嬢様っぽいさかい、適当にお嬢様って呼ばしてもらうで」

「あ、はい。お好きにどうぞ……」

もう既に大分呼んでるじゃないか、というツッコミは公江の胸中に留まったようだ。

「ほんで紹介が遅れよったな。ウチは川端泰葉。ヤスハでもヤスでも好きに呼んでもろうてかまへんで。エヌ・ピー・オー法人からあぶく銭をかすめながら、あいりんの新人案内人としてあくせく働いとるところや。現在独り暮らし、恋人募集中のアル中で、もう今年で二十八になる」

「えっ！ 意外と歳近いんですね。私、今年で二十六です」

「おー、あいりんではかなーり珍しいぴっぴちの若者やな」

「いやいや、そういうヤス姐さんこそ」

「はっはっは、ところでお嬢」

「はい？」

「もちろん今のは、見た目よりも若かった驚きなんやろな……？」

「やだなあ、そんなの決まってるじゃないですか」

「はっはっは……」

「ははは……」

お互いに乾いた笑いをこだまさせているが、両者があいりん地区における希少な若者であるという点は事実である。二〇〇五年の人口分布統計によると、あいりん地区における四十歳未満の人口構成率はわずか十五パーセントにも満たない。超高齢社会と化しているあいりん地区において、彼女らはまだ赤子にすら満たないのだ。

「はい、書きました」

「ご苦労さんっつ」

「……どうして？」

「すぐに分かりましたよ。お風呂の時、ずっと見ていたじゃないですか。泰葉さんにとってこの仕事の楽しみの半分は、あいりんに来た理由を聞くことだったみたいですけど、ひょっとしなくても残り半分はこっちなんじゃないですか？」

公江はわざとらしくポケットから取り出したスマホをいじる。

「どう思いますか？ あいりんに訪れた若い女性ばかりを狙って食い物にし、被害者は泣き寝入りするしかない

『レズの紹介人』さん」

「どないして、そのことを……」

「インターネットは便利ですね。お隣さんが知らないことも、法人の名前で検索をかければ、レビューには全て書かれていますから。なんでも、お酒に睡眠薬を混入するのがお得意のようですね。ひょっとしたら、これにも」

公江はデルカップのグラスを傾け、その琥珀の液体を艶めかしく凝視した。

「もう何か細工されたりしていますか？」

「ははは……こら、一本取られたわ。晴れてお互いに犯罪者、つてわけやな。」

公江はデルカップの蓋を締め、ゴミ箱に放り込んだ。

「どうする？ 一緒に自首でもしよか？ 一昔前やとただの傷害未遂やったが、今なら強制性交等未遂で立件できるで」

中の液体がゴミ箱の中身に染み渡り、甘い匂いが部屋に充満する。

「さて、そろそろ寝ましようか」

「……ほんまにええんか？ レズの強姦魔と添い寝するよりかは、西成警察署のブタ箱のが幾分安全やと思うが」

「別にいいですよ……そもそも」

公江はテレビのスイッチを消し、蛍光灯の紐を一度だけ引いた。薄暗い部屋の中、お互いの顔だけが浮かび上がる。

「そもそも、こんな葉なんか頼らなくても別によかったですよ。私にとっては男性との付き合いの方が、お試しみたいなものでしたし」

公江は半分脱がしかけていたジャージの上着を一気に

のドヤ価格帯と比較しても、格安で泊まれる。少しレント口を通り越して廃墟に近いとるが」

「泰葉は窓を少し開け、上に向かって叫んだ。

「おう、おっさんおるかー!」

「おうなんや、ヤスカ」

白髪混じりで熊面をしたヒゲモジャの大男が、半纏姿にステテコという出で立ちで、のっしのっしと外階段を降りてくる。

「ウチの新人、泊めたって。一日なんぼ?」

「おっさんは指をスツと一本立てた。

「一週間やと?」

立てる指がスツと五本に増えた。

「なんやおっさん、コッスイ商売しとるの。お嬢はトンキンから流れ着いて苦労しとるんやし、もうちっと負けたらんかい。あ、せや。ウチの部屋二人で泊るんやったらどうや?」

小指と薬指が閉じられ、指は三本に減った。

「なるほど、ほなそれでいこか」

「あ、あの、つまり……?」

「ああつまりな、ウチと二人部屋やったら一週間で三に負けといたるって。これでええかな?」

「分かりました、三万円ってことですね」

「そうそう……へ?」

「あ、それなら大丈夫ですよ。今すぐ手持ちでも支払えるので、別に前払いでも……」

泰葉とヒゲモジャのおっさんは思わず顔を見合わせた。一拍、間をおいてから、泰葉の下品な笑い声がドヤを響かせる。

「ぶっ、ぶっひゃっひゃっひゃ!」

「ええ……」

「いっ、一週間に三万って……自分、おっさんのドヤがどんな高級旅館やおもてんねん!」

「え? は、はあ……」

「あ、安心せえ、お嬢。三万もいらへん、三千元で十分や」
「え……えっ!? 一週間宿泊で、たったの三千元? 本当に経営成り立ってるんですか、それで?」

「くっくっくっ……今度は煽られとるで、おっさん」

「じゃかあしい、余計なお世話じゃ」

どれぐらいの沈黙が滞留したのか、誰も分からないだろうし、誰も覚えていないだろう。

「えーっと……ヤス姐さん、何のことでしょう? 確かに私は不正経理に加担はしましたが、まだ監査も始まったばかりですし、後々どうなるかは分かりませんが、今すぐに警察のご厄介になるわけでは……」

「自分、今日ニュース見たか?」

「え?」

《……続きまして、朝からお茶の間を賑わせております。こちらのニュースに関する続報です》

「ニュース。今朝からどこのテレビ局も、この話題で持ちきりや。銭湯でも、弁当屋でも、たつ屋でも……」

「ちょっと待ってください。一体何の話……」

《現在重要参考人として全国指名手配中の〇〇〇△△は、大阪市内で潜伏している可能性が非常に高いと見られ……》

「なあお嬢。公開されているこの『〇〇〇△△』って人の顔写真やけど」

「……」

「髪型も、着ている服装も、目元も整形したのかだいぶ

違いはあるかもしれないが、どことなく、誰かに似るとは思わんか?」

「何言ってるんですか……私の名前は阿部公江だって、最初……」

「一瞬見えたが、すっかり財布に入ってたで。免許証」

「ちっ……」

「おっと、いま素が出ったな。あいらんは偽名を使う人間も多いからなあ。顔写真なしの偽造保険証ぐらいやったら業者に頼んですぐ作れたのに、ちいっとばかり準備が足らんかったなあお嬢」

「しっ、しかし……」

《被害額はおよそ三億円と見られ、ネット上では平成の三億円事件として、大きな話題を呼んでおります》

「ほら、三億円ですよ。それだけの被害額となると、持ち運ぶこと自体私には無理です」

「ま、現金ならそうやろな。せやかてこのご時世、紙幣を持ち運ぶ泥棒の方が少ないやろ? 宝石、金塊、金券、色々手段はあるとは思うんやけど……実のところ、グラムあたりの単価が非常に高額で、一番持ち運びがしやす

どれも妙に古めかしく、どこか幻想的な光景が部分的に切り抜かれたカード達は、泰葉の好奇心を捉えて離さなかった。

「へー、これどしたん？」

「ええっと、実は親戚の子がこっちに住んでいまして、彼から借りっぱなしだったカードを返そうかと……」

「それでそんな古臭いカード、一枚一枚プラケースにしまつとるんか。はあ、何や知らんがお嬢はママやなあ」

「一応借り物ですからね。ははは……」

公江の笑い声は、妙な乾きを帯びていた。

*

部屋は和式の四畳半によって構成されていた。本来一人住まいを想定している空間なので、流石に二人が入ると窮屈さを感じざるを得ない。

内装はちゃぶ台、布団、テレビの三点セットで構成された、可もなく不可もなくといったところの一般的なドヤである。備え付けの古びたお茶パックと使い捨ての歯ブラシはサービスらしい。

*

とりあえず上着を脱いで、薄手のセンベイ布団の上にゴロリと寝転がった公江は、次第にウツラウツラと睡魔に襲われた。

「ほれ、寝とる場合ちゃうで」

「うわっぶ」

そのまま横になろうとした公江の顔面に向けて放り投げられたのは、くたびれた一枚の手ぬぐいだった。

「お嬢にはお昼から早速看板娘となつて、あくせく働いてもらわにゃあかんからのう。これから客先に出るんじや、まずは銭湯行くで」

「銭湯……せ、銭湯ですか！」

「おお、どしたん？」

「私、入るの始めてです！」

「なんやお嬢、銭湯も入ったことないんか。こらひよつとしたら、ほんまもんの箱入り娘かもしれへんな」

「はい！ 私、今まで箱入り中の箱入りだったんですよ」

「えらいテンションの振れ幅が妙なやつぢや……」

「ちなみにカップ酒を買うときは、コンビニよりも自販機の方がごつつ安うなつとるからよう覚えとき。ほら、こも鬼殺しワンカップが百十円や」

「さつきから賞味期限切れのジュースとか一リットルの牛乳とか、一般社会からは逸脱した商品ばかり目に付きますね。あいらんの自動販売機って、一体どういう管理になつてるんでしょね……」

「さー知らへん。適当に安く仕入れた液体でも詰めといて、とりあえず売り切れるまで放置しとるんちゃうん？」

「買う方も買う方ですが、売る方も売る方ですね……」

「ささ、大関もすごいもデルカップも選り取りみどりや。早う帰つて呑も呑も」

「えーっと……こんなに呑みますか？」

「ええねん、余つたらドヤの共用冷蔵庫にでも突っ込んでいたらええ。気がつくると半分減つたりはしとるが」

「それ絶対誰かに呑まれてるじゃないですか……」

時刻は既に十二時を超えていたが、近隣住民のご近所迷惑などを考える地域柄でもない。女二人のうち特に一人はやかましくかしましく、もう待ちきれず呑み始めて

しまったワンカップを片手に、薄暗い帰路へとついた。

「今宵は星がよう見えるな。オリオンさんもくつきりや」

「ヤス姐さん星座にも詳しいんですか、意外ですね」

「む、失礼な。あれがオリオンさんの左脇の下から生えてる三角形で、あれがオリオンさんに足蹴にされとる小动物で、あれがオリオンさんに襲いかかろうとする猛牛やろ？」

「冬の大三角、うさぎ座、牡牛座ですか。なかなか覚え方してますね」

「むかーしまだおかんが生きとるうちに、真夜中に家族三人で星座を見に行ったことがあるんや。奈良の若草山までおとんが車を走らせて、原っぱに大の字で寝そべつてな。そんな時におとんがベラベラ喋つとった内容が、ウチの星座に関する知識の全てや」

「なるほど……星座はヤス姐さんとお父様との思い出とあったところでしょうか」

「そうそう、あの頃まだおとんがおとんをしとつたからなあ。若草山から眺めた星空はこと比にならんぐらくつきり見えて、思わず幼心に心打たれてもうて……」

「……ところでヤスさん」

「はいはい、なんでござんしょ」

「入る時に、入場の係員さんとごそごそ話してたのは何かあったんですか？」

「係員さん……？ ああ、番台の若旦那の事やな。あいつは昔からの幼馴染でな、ちょいとニュースでも見ながら世間話しとったのもあるけど、あれはな、番台さんに財布を預けとったんや」

「財布、ですか……？ そういえばヤス姐さん、部屋を出るとき私には貴重品を置いていけ、って言ってましたよね」

「せや、どうせ預けることになるしなあ」

「とはいえロッカーにも鍵が付いてますし、そこまで神経質に……」

「いやいや、あんなコソ泥のネグラみたいなのロッカーに、貴重品なんか突っ込んでみい。ものの五分も立たずにパチられてまう……盗まれるで」

「え、本当ですか？」

「ホンマもホンマ。どうもこのコソ泥は全ロッカーの合

れに、高校までは別のところにおったからな」

「どこに居たんです？」

「大阪城のすぐそば……大阪市の児童相談所や」

「えっ、あっ……」

「いやいや、言うてもそないに気にする必要はあらへんよ。普通におかんがポックリ逝って、普通におとんから虐待されて、普通に兎相に保護されて、普通に新聞配達で生計を立てていただけや」

「ちょっとちょっと、普通に重い話じゃないですか」

「まあ今はどっこい生きとるからな。人生結果オーライちゅうことで」

「あっ、ひよっとして……」

「ん、どしたん？」

「いえ、気に触ったらすみません。ひよっとして、朝の男に成りたかった、って話も……」

「まあそんなところや。確かに理想の子育てをしてくれるようなおとんに出会えなかったから、ちゅうのも理由の一つかもしれへんなあ。あるいは……」

「あるいは？」

鍵をこさえとるさかいに、鍵かけてようが基本的に安心はできへん。番台のおっちゃんに預けるのが一番安全なことやな」

「は、はあ……」

「まあこれに限ったこととはちゃうけどな。日本には日本の常識があるように、あいらんにはあいらんの常識があるんや。公園に住むホームレスのテリトリー、炊き出しの実施時間と場所、ドヤの選び方……。当然ながら良習も悪習もある。せやけど、全部ひっくるめてあいらんの習慣やとウチは思うとる。だから一部暗黙の了解になつてしもうた習慣を新参者に教えるのも、ウチらの大事な仕事ちゅうわけやな」

「おお、何だかっこいいですね」

「よせやい照れやい。ほな次は、お嬢の身の上でも聞かせてもらおか」

「私の……ですか？」

「せや。要は何があつて、あいらんまで流れ着いたんかちゅう話や。この仕事の楽しみの半分は、これを聞くところやさかい。あ、内容がヘビーやったり犯罪ストレス

「家に女をとつかえひっかえ連れ込んでくるような毒親を、一人の男とすら認めたくなかったのかもしれない」

「それはまた……何と言いますか、奥様を亡くされたショックが大きかったのは分かりますが……」

「だからウチは男に成りたかったというより、正しくは、そういう男よりも頼りがいのある女に自分が成りたかった……のかもしれない。こうやって人を支援して、人から頼られる立場の仕事をとるのも、何の因果かその延長になつとるしなあ。そういう意味では天職に恵まれたのかもしれないし、神様の様仏様にも感謝せんとあかん」

「そうですよね！」

「何や急に」

「昔がどうであろうと今が幸せならどーでもいいんです。私も会社の人間から束縛されていた頃に比べると、今の方が断然生き生きとしますよ」

「え〜？ それは困るわな〜、犯罪者と一緒にされてまうわ〜」

「ちょっと、大声で止めてくださいよ。まだ重要参考人

做されて、余罪が追求されるやつやん」

「詳しいですね、ヤス姐さん」

「お姉さんドラマ好きやから、こういうのよく知ってるで」

「でもいいんです。これから捕まるとしても、このままどこかへ逃げたかったです」

「ほなら、どないしてあいりんに流れ着いたんや？」

「昔ニュースで、殺人犯が潜伏していたっていう報道があったんです。だとすれば、逃げる人間が向かう先としてはピッタリなのかな、と」

「そら悪い印象植え付けられとるなあ」

「そうですね……すみません。地元の人にはこんな理由で来てしまって、申し訳ない限りです」

「まあ事実やししゃーない。まずはあいりんのイメージを切り替えていくところからや」

「……でも、今回で十分に思い知りました。もうコリゴリですね」

「粉飾が？」

「男ですよ」

「そっちかいな」

「散々口説き文句を垂れ流すのは口先だけで、気まぐれで抱きたい時に抱いて、利用価値がなくなったらポイ。私はおもちゃになりましたかったんじゃありません」

「そらーたまたま悪い男に引っかかっただけやろ。お嬢ほどのべっぴんさんやったら、男も選り取り見取りとちゃいますん？」

「そんなことないです。私、今の会社に入社するまで男性と触れ合う機会がほとんどなかったんです」

「ほう……高校は女子高で、大学も女子大みたいな」

「その通りです。だから私の中の男性は、お父様か、少女漫画に出てくる王子様の二種類。まだよく知らぬ殿方という存在そのものに、この歳になるまで神秘性や憧れを抱き続けていたんです」

「自分、童貞の対極みたいな女やな……」

「道程？」

「ああ、かまへんから続けて続けて」

「でも今の考え方は真逆です。つくづく自分が違う方の性別に生まれてよかったと、心の底からそう思ってますね」

「ふーん……」

表情を浮かべたのは、彼女が秘書を務めていた頃の時給換算と比較してしまったからであろう。これでも時給はあいりんでも高水準の部類に含まれる。

「おばちゃんおおきに。よし、じゃあ呑もか！」

「いいんですか、貯金とか宿代に回さなくちゃ……」

「いーやっ、今日ぐらいいえねんええねん。宵越しの銭は何とやら言うやろ。今日は初日祝いやしパーツと呑も呑も」

「そういえばヤス姐さん、アルコール中毒じゃないんですか？」

「一日ぐらいかまへんかまへん。お医者様もお天道様も見てへんうちにや」

「大丈夫かなこの人……」

まず泰葉が案内したのは、弁当屋から歩いて数分のところの位置するホルモン串焼きの「やまき」だ。まだこの時間だというのに、既にべろべろの客がカウンターにたむろしごった返していた。店の親父は黙々と鉄板で串を焼き、ホルモンの焦げる香ばしい香りがもくもくと店外へ漏れ出す。

「ここはな、あいりんの酒呑み共が一軒目に訪れることで有名なんや。ホルモン、キモをハイボールでサツと流し込んで、次の店に向かうのが乙つてもんやな。ほら、席空いたで」

「なかなか味があると言いますか、いい雰囲気ですね」

「お嬢はいける口か？」

「お酒ですか？ まあ人並みには呑めますよ」

「よっしゃ、今日は三十円奮発してビールにしたろ。おっちゃん、ホルモンとキモを二本ずつ。あとビール二本もらうで」

「えっ、勝手に取っていいんですか？」

「そういうシステムやさかい。後で自己申告で勘定するから問題あらへん」

「酔っ払ったら忘れそうですね……」

「ほいお嬢、まずはホルモン串や」

「え、ええっと。どうやって食べるんです？」

「食い方も何も。串を取ってこのタレにつけてこんで、口に放り込んで、ビールで流し込むだけや。あ、串カツのソースと一緒に二度漬けはアカンで」

く眩き、泰葉は浴槽から抜け出した。

「ぼちぼち仕度を始めたアカン時間や、お嬢、もう上がるで。この名物ブローバスはまた今度にしとこか」

「は、はい……ところでヤス姐さん」

「どしたん」

「その、この時間から始められるお仕事っていうのは、一体何なんですか？」

「何や、まだ知らんかったんかいな！」

「そらヤス姐さんが教えてくれないからですよ」

「それもそうやな！ これからお嬢には、箱入り娘にはちょいと厳しいであろう、地獄の激務をしてもらうで」

「じ、地獄……」

「その名も……」

「その名も……？」

「弁当屋や」

「弁当屋……？」

*

「おばちゃん、助っ人連れてきたで」

「おお、ヤス。ちいと遅かったんとちゃう？」

泰葉と公江が弁当屋「まんぷく」に到着し、店に佇むしわくちやの老婆からいきなり手渡されたのは、まず遅刻に対するお小言と、次に年季の入った黄ばんだエプロンだった。

「新人さん？」

「は、はい。そうです」

「おにぎりセットは百円、日替わり弁当は二百円、大盛りが三百円。ええか？ 体に染み込ませて叩き込んだときいや」

「は、はあ……」

相手に物言わせぬ老婆の凄みに対し、公江は生返事を返すことしかできない。

「ほな開店！」

開店と同時に現れたのは、午前中の勤労を終え空腹に身悶える大量の日雇い労働者達であった。

「はい、大盛り一つ、こっちは日替わりやな。そっちはおにぎり二つ、普通一つ、あ、新人さん大盛り補充しといてや」

「は、はいっ」

「大盛り一つ！」

「はい、大盛り一つ入りました！」

「おにぎりまだ来とらんのやが？」

「はいっ、直ちに直ちに！ あの、ヤス姐さん！」

「はい、おにぎり一つ！ ……なんやお嬢？」

「私、何でこんなにもみくちやにされてるんでしたっけ……？」

「決まっつとるやろ、おまんま代を稼ぐためや。はい、大盛りおまたせ！ 手が止まってるでお嬢！」

「は、はい……」

それからもひっきりなしに来客は続き、泰葉と公江がようやく一息つく頃には陽も傾き始めていた。

「よし、山場も超えたし休憩や。新人も好きなん選んで、胃袋にかっこんどき」

「は、はい……休憩入ります……」

公江は適当な弁当を一つ選び、店の厨房へと持ちこんだ。奥では古びたテレビがガーガー音をかき鳴らしながらお昼の番組を放送しており、泰葉はそいつとにらめっこしながら飯を胃袋にかっこんでいる。

「お疲れ様です」

「おっ、お嬢もお疲れさん。初めてにしてはなかなかの手際やったやな。経理職で慣れとるからやろ」

「そ、そうかもしれないですね。仕事柄激務はよくあることなんで……」

「そうやった。お金の扱いは慣れたもんやったな」

「いえ、普段は紙の上でしか会計しませんし、こんなに百円玉を扱ったのも人生で今日が始めてです」

「そないなもんなんかな」

「そういうもんですよ……。あら、このお弁当、よく見ると二百円とは思えない高クオリティですね」

「せやろ？ おばちゃんが毎日スーパー玉出で食材仕込んで、赤字覚悟で作っとるんや」

「へえ、味もなかなか……。きつと梅田のオフィスビルとかに出店したら、毎日ビジネスパーソンが買いに来るんじゃないですか」

「ちゃうちゃう。あいりんで出店するからこの値段設定なんや。だからこそ数多く売っていかないとやっていけないのや」